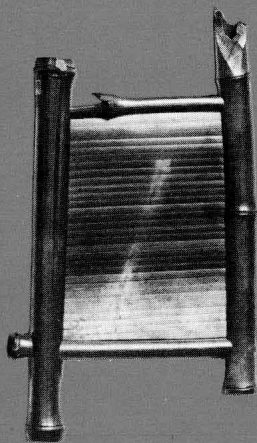




宮柊二

白秋・迢空



河出書房新社

白秋・逍空

©1984

昭和五十九年八月十五日 初版印刷
昭和五十九年八月二十五日 初版発行
定価は函・帯に表示してあります

著者 宮 柁二

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社
東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二
電話東京四〇四―四一―二〇一（営業）
振替東京〇―一〇八〇二（編集）

印刷 多田印刷
製本 若林製本

Printed in Japan

ISBN4-309-00376-1

目次

「概論」覚書——「白秋における悲しみ」の中	七
鐘の音美し——『海阪』の一首	三
わが師を語る	四
織くして長久なるもの——白秋の俳句について	二〇
抵抗としての白秋——が書けない弁	二六
『椽』の世界	三三
白秋のふるさと	三九
没後十周年に際して	六二
白秋秀歌鑑賞	七五

白秋先生歌碑

『桐の花』

白さるすべり

白秋の脚

はるかなる追憶——白秋没して二十年

白秋の『椽』の歌

柳川が語りかける詩人の心

北原白秋二十五周年

北原白秋の短歌について

北原白秋先生

千鳥の啼き声

白秋における芭蕉

戦時中の白秋先生

白秋先生の思い出——「執行」という作品について

四

六

七

七

八

九

一〇

一二

一五

一五

一六

一〇

一四

一六

詩人の光とかがやき

一四

私の愛することば——「個の寂心」

一五〇

微視的に追う巨視的な像——『北原白秋』評

一五三

私を感動させた本——『桐の花』『思ひ出』

一五五

南には南の孤独が

一五八

白秋三百首

一六三

*

白秋と迢空

一八一

*

折口信夫の歌

一八五

気稟高い古典への愛情——迢空先生追悼

一八七

釈迢空論序論

一九〇

「歌の円寂する時」以後

一九二

「歌の円寂する時」の前後

一九五

『倭をぐな』を通して

二三

『倭をぐな』と『現代檻樓集』

二七

おもいで

二九

いわゆる難解歌一首

三四

内奥の生命に及ぶ——『釈迢空歌抄』評

三六

句読と一字空け

三三

『古代感愛集』の魅力

三六

迢空歌との邂逅

三九

* *

白秋先生の陶像——あとがきに代えて

四〇

初出誌紙一覧

四九

引用歌索引

五二

白秋・迢空

函・本扉
竹製家具（稲垣尚友作）

「概論」覚書

——「白秋における悲しみ」の中

一

たとえば「春の鳥な鳴きを鳴きそあかあかと外の面おもての草に日の入る夕」(『桐の花』巻首)というような世界と、「秋の蚊の耳もとちかくつぶやくにまたとりいでて颯ささを吊らしむ」(『牡丹の木』巻末)というような境地との間には、いかなる歲月がこめられているのであろうか。

また、歌を「一絃の古琴」といい「新人の悲哀は古い詠嘆の絃にのぼせて象徴の世界を観照すべくあまりに複雑であり深刻」といい「私の歌に欲するところは気分である、陰影である、なつかしい情調の吐息である」(『桐の花』序)といった情調、気分の世界から、「ただ煙霞余情の裡、平生の和敬ひとへに我と我が好める道に終始したるのみ」と述べ「黒檜の沈静なる、花塵をさまりて或は識るを得べきか」(『黒檜』序)と言うがごとく、明らかに道あるいは象徴を掲げるに至った長い変化の道程をどんな姿勢でうかがったらいだらうか。また「明治三十二年十五歳——志を文学に立」(『白秋年譜』)ててから没年の昭和十七年五十八歳(数え年)まで、その足かけ四十四年間の全生活をこ

の一筋にかけて生きたところというものはどんなものだったろうか。

二

手にとれば桐の反射の薄青き新聞紙こそ泣かまほしけれ

大きな手があらはれて昼深し上から卵をつかみけるかも

松風のしぐるる寺の前どほり通る人はあれど日の暮のかげ

山川のみ冬の瀬に影ひたす椿は厚し花ごもりつつ

山路来てひたすらひもじ落の葉に満ちあふれる光を見れば

白南風の光葉の野薔薇過ぎにけり蛙のこゑも田にしめりつつ

遠つあふみ浜名のみ湖冬ちかし真鴨翔れり北の昏きに

行く水の目にとどまらぬ青水沫鵲鴒の尾は触れにたりけり

物の葉やあそぶ蜩蝶はすずしくてみなあはれなり風に逸れゆく

逆光の玉の白菊仰臥に見つはなげけやがて見ざらむ

冬ひらくミモザの枝のひとつかね老さぶ友の笑顔し持て来

仮に各歌集から構えるところなく一首ずつ引いて見れば、こんな作品も引くことができる。ここ

には一貫して——『桐の花』『雲母集』を除いて——何かしら人間の周囲をみずから突き放して、

自然の変化にのみつくづく顔を寄せているような姿がある。何かしら表現の鬼のような非常に密

度の濃い高次の制作手法がある。何か完成した均齊な緻密さが漂わしている肌ざわりの冷たさがあ

る。詩句には言わないが、その作品の右と左をうずめている寂しさがある。

〔桐の花〕

〔雲母集〕

〔雀の卵〕

〔風隠集〕

〔海阪〕

〔白南風〕

〔夢殿〕

〔溪流唱〕

〔椽〕

〔黒檜〕

〔牡丹の木〕

ここには「生命の寂寥所」（島木赤彦）とか「業余のすさび」（斎藤茂吉）などというような行き方とも違い、またそれとともに「筑後柳河のトンカジョンは当然町奴氣質にも狭斜花魁趣味にも発展して行つて然るべきもので、この艶媚妖麗の質をして趣くだけ趣かしめたならば、彼は或ひは歌麿を越えて、さらに大雅堂の遊心芸術をも窺視することが出来たであらう——白秋の芸が四十歳以後に入つて拘泥の態あるは歌壇のために一つの大きな損失と見なければならぬ」（太田水穂）などいう批判とも別に、自分一人を歩きつづけて「一首は遂に一首にして亦生死の道なり」（『白南風』序）と言ひ切り、なお一人で歩きつづけた作家の作品がある。

三

ずっと以前から、白秋作品に窺われる「悲しみ」の影を重大に見、その変化をたどつてみたいと考えていた。實際的に悲しみを詠った作品の数からいえば、悲しみをたびまねく詠う茂吉の作品に比して、あるいはその何分の一、何十分の一にも当らぬであらうが、白秋の「悲しみ」と茂吉のその「悲しみ」の性質は違ふように思える。

また、「私は本来光明の子であらうか」「私は何事にまれ、また如何なる境遇に置かれてもうれしいのである」（『薄明消息』）というような手記を読めば、論をすすめる上に戸惑うのであるが、「童心には八方睨みのところがある。どこが個性だといつて捉へにくい。北原氏の顔の一応表面に出てゐるところのものは捉へ易い。だが少し深くはいつて行かうとすると実にむづかしい。爪を立てにくい円にぶつかる。恐らく、童心それ自身はこんなことを知らないで冴えてゐるのであらう」（岡本かの子）というような文章を読めば、その「爪の立てにくい円」が、また、

あなたを単純と見たらいいか
のんびりした人に見たらいいか

あなたは人に親しみ

対手がどこまで睨いて来ても、

それをあまり問題にしてはゐない、

どこまで行つても底が見えて来ない、

底を見せない

底には行きにくい、

或程度までゆくと戸がしまつてゐる、

そこにあなたはゐた

(室生犀星)

というような詩の「戸がしまつてゐる、そこにあなたはゐた」というような一節と一致するということではないが、私の言おうとする白秋作品に漂う「悲しみ」に近いような気もする。たとえば「荒涼たる首山の山巔」(ゲート)、その首山の荒涼を耕しつつあった作業の姿を私は想像してみたりする。私はその孤独を「悲しみ」と呼んでみるのである。この白秋の「悲しみ」はどこから滲むのか。

四

短文の結論を急がねばならぬ。白秋作品に漂う「悲しみ」は、白秋が自分に課した態度からくる。「群衆に向かつて自分の酔狂や苦悶を売るのは厭だ」(上田敏)といった系列に身を置き、「小主観の奔騰は低卑行」(『短歌の書』)だとし、たとえば新しい言葉で形容すれば、「死の天使を闕の外に待た

せて置いて、徐かに脂粉の粧を凝らすとでも云ふやうな」(森鷗外)高踏の孤独を一人に守持しようとした決心から来ているのではなからうか。作品はそういう決心を漂わせ、悲しいまでに彫琢された。容喙することを許さなかった詩人の「悲しみ」を四囲に纏綿させて作品を創りつづけ、その悲しみを忘却した時に「秋の蚊の耳もとちかくつぶやくにまたとりいでて蛸を吊らしむ」というような作品を詠った。そうした白秋の、一時期のころを私は思うのである。

(白秋作品の変化は、だいたい三期に分けられるように思う。『雀の卵』までを(一)、『椽』までを(二)、『牡丹の木』までを(三)として、しかも『雀の卵』までの三冊は各々独立と見られるし、さらに『雀の卵』は(一)と(二)に跨っている歌集とも見られる。ただ、(一)から(二)(三)へ、すなわち『雀の卵』から『椽』『黒檜』への変化は軽々しく看過できぬと思う。この小文は、そこを注意してみたいと思って、書こうとした。)

鐘の音美し

—『海阪』の一首

空晴れて鐘の音美しくは苜蓿つめくさの受胎の直昼近づきにけり

『海阪』巻末歌。「トラピスト修道院の夏」と題する作品中、「麗明」と詞書が付された一首である。
三木露風は修道院詩集『信仰の曙』の中で、

われ雪に連る山々をみつ

はるかなる海を望みつつ

ナザレの邑を懷ふ

聞くならくこの地

ガリレアの聖地に似たりと。

とこの土地を詠っている。この一首は、例えば「どの草堆つかの中からも、縮れ毛の童子の頭が覗いて見える。冠毛かんぼうのある鶏は乾草をかきわけて、ちいさな薊馬や甲虫をあさり、鼻面の白い仔犬は、もつれた草の中をころげ廻る」(ツルゲエネフ「田舎」中山省三郎訳)というような欧羅巴ロシヤが詠わ

われた散文詩の一節をおもい起させる雰囲気もある。歌意は「澄明に晴れた空を、修道院から鳴らす鐘の音が美しく渡っている。その空の下の地上には、苜蓿の受胎を行うべき真昼の静謐が近づきつつある」というのであろう。

かつて非常に主情的だった白秋の詠風が一転して「苜蓿の受胎の真昼」というような、感覚を基礎として一種清新な、濁りを除いた写生句を見せ始めたのは、この『海阪』或いは『風隠集』あたりからである。梁塵秘抄なぞの影響を取入れた『雲母集』、芭蕉の寂寥に心引かれていった『雀の卵』等を通り抜けて来て、ここには『桐の花』の清新が、身を以って通ったそれらの過程を加えつつ更にまた違った形に於いて復活し始めているのを見る。四十一歳の時の作。

二句切れは白秋の好んで用いた詠法であるが、ここでは甘美な韻律的な内容を伝えるにふさわしい。

わが師を語る

記者 昨日偶然に、穂積忠氏に会いましたが、童顔ですけれどすっかり白髪ですね、齢はまだそうでもないのに。多磨と穂積氏との関係はどうなったのですか。同氏が閉め出されたようにい人もあります。

宮 僕はもう十年位会いません。多磨が穂積氏を閉め出したように言われますが、全然多磨から出られたわけではなく、ただ、選者を止められてから追々疎遠になったようです。僕は出征中でしたから、くわしい事は知りませんが、同氏が選歌を期日までに送らなかったり、出詠の約を平気で怠ったりするので、師匠（白秋のこと）は穂積の不渡手形と呼んだりしました。その他にトラブルがあったかも知れません。

記者 多磨が分裂作用を起すのではないかという噂を耳にしましたが、ほんとうですか。

宮 そういうことはないと思います。木俣君や岩間君が多磨の解消論をやるので、そういうことが實際化したように風聞されるのではないかと思います。僕なども横浜を中心にして結束して何かやるのじゃないかという風にみられているのかも知れません。吉原敏雄君の「碧落」に誰かが多磨の分裂のようなことを書いているので、そういうところからもそんな噂が出たのでしょうか、あれ